方向

第一四一号　一九九二年二月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗　（三二）　1991 12 29　原田憲雄

『続京都風土記』

一九四二年（つづき）　五朗、四十五歳。さきには書き落したが、この年四月、二女迪子が衣笠国民学校に入学。六月には、長男朗が、京都大学理学部二年生で、海軍技術依託生となった。

『随筆　京都風土記』の目次を掲げておこう。数字は頁数。

序文　吉井勇／正月一　梅一〇　京のさくら一八　木蓮二七　河骨の花三四　鷹峰光悦寺三三　等持院界隈三六　六月六九　比叡山の夜七三　夏の花八五　大文字の火九四　苔寺の苔一〇四　太秦ほとり一〇九　秋草一一九　柿主や梢は近き嵐山一二七　嵯峨野点描一五一　定家卿と嵯峨一六二　黒羊羹と尼さん一七六　洛西水の尾一八二　鞍馬・貴船一九六　石松庵二〇六　蕎麦の花二二五　冬の時雨二三三　ときはさんざし二三九　大原の里二四七　正月日記二四五　春を待つ二五三　京都の人と生活と二六三　伊賀に遊ぶ二六四　木曾から甲斐に二九二　青潮三〇五　秋意三二五　巻末私記三三五

なお、大塚朗氏の教示によれば『随筆　京都風土記』の再版は昭和十七年十一月二十日、二〇〇〇部。印刷者、京都市下京区猪熊通七条南入国文社印刷所石井喜太郎。三版は昭和廿年十二月二十日、一〇〇〇〇部。売価税込拾参円。印刷所、京都市上京区上橋木町千本東入橋本岩太郎。発行所、株式会社大雅堂。

十一月十五日『岬』第十一輯（一週〈ママ〉年記念）が発行された。わら半紙十四枚を二つ折にしコヨリで綴

じた謄写版刷り。「内容」は「あらくさ（短歌）」原田憲雄、「続々押抄（随筆）」赤谷明海、「『随筆 京都風土記』広告」大塚五朗、「感傷といふこと（随筆）」平野謙三、「九月二日（随筆）」岡本和気子、「街（詩）」テオドール・シュトルム作、大塚朗訳、「藤平卿行状記（随筆）」足利八郎、「開山忌（短歌）」森田曉平、「満州里から（書簡）」森田直一、「雑詠（短歌）」田中千美、「随筆 秋」宮崎篤三郎、「編輯後記」大塚五朗。「後記」には次のようにいう。

□一艸舎一週年記念号をプリントにしようと計画して同行からそれぞれ原稿を集め乍ら、いろいろな事情からのびてしまって今漸く送るといった結果になってしまった。この不勉強ぶりは十分謝罪しなければならない。□それに私の原稿が出来ないのでのせられなく、これ亦申わけない次第。内外多事、他意ある事でないことは私の近況を知っていてくれる人はゆるしてくれるであらう。□同行、平野謙三・足利八郎・井手喜一郎君の新しい入営は一艸舎を淋しくしたけれど、これ亦止むを得ないこと、武運長久を祈るや切。□原田憲雄君・高田益雄君は豊橋から東京から帰洛してきた。うれしい事である。……

高田・原田の「帰洛」とは、予備士官学校から京都の原隊への復帰をさす。同行名簿では、亀山文子、粟野虎一、大野木富子、志波敏、宮田義子が新たに加わっている。

一九四三年　五朗、四十六歳。勤務先、住所同じ。松子、四十五歳。朗、二十三歳。喜子、十九歳。樹、十五歳。哲、十二歳。迪子九歳。洋子、二歳。喜子は三月、京都府立京都第二高等女学校卒業。

三月上旬、『艸』第十三輯（京都風土記批評号）発行。わら半紙十六枚を二つ折にしっヨリで綴じた謄写版刷り。内容は、「風土記上梓前後」大塚五朗、「随筆京都風土記に就いて」（未完稿）原田憲雄、「京都風土記を

読みて」赤谷明海、「京都風土記随感」杉田荘作、「『京都風土記』読後感」田中千美、「『京都風土記』を読みて」宮崎篤三郎。安田耕一郎・小菅鱗蔵・玉木退三・岡本昌夫・万造寺斉・渋谷真彦・田中武彦・三上貫一・細谷福太郎・安田青風・加藤将之・岡本大無・幸節静彦の書簡、『京都新聞』の大庭雛、『京都帝国大学新聞』の光田作治の書評、読者のこゑ一束。反響の盛大が伺われ、次の『続京都風土記』の予告も載っている。

続京都風土記　▽大田喜二郎氏装幀△株式会社大雅堂刊

どこがどうよかつたのか知らないが、京都風土記に引き続いて、続篇を書けと本屋がいふ。一寸甘やかされたやうな気になつて、ともかくも続篇をかいた――称して『続京都風土記』といふ。何時ごろ出るか、どんな体裁になるか、定価はいくらか、凡てまだわからない。出版事業令によつて統合された新会社―株式会社大雅堂―から出る事になつてゐる。出たらよろしく吹聴してほしいと思ふ。（大塚）

その『続京都風土記』は三月二十五日に発行された。『京都風土記』と同じB6、箱はなく、表紙と同じ体裁のカバーが巻いてある。表紙は大田喜二郎の鉛筆での大原女のスケッチに、著者の手で書名を記す。挿絵はなく、豊田多八氏の写真六葉がはさまれている。本文三〇一頁。目次と要付の主要項目は次の通り。

戦捷にうたふ　三　歳時記京都　一三　野の道・山の道　一四　情余（歌）　二四　洛北一乗寺　八八　茶味　一〇一　常盤の里　一一〇　日蝕の庭（歌）　一三一　鬚　一三五　薮柑子まつり　一四六　師走の京　一五九　小倉山に関する一考察　一七一　心境　一八五　嵯峨野（歌）　二〇一　茶の花　二三〇　唐招提寺の一夜　二三五　旅（歌）　二三三　通草の花　二三八　雪　二五一　道　二五五　人　二六七　テル　二七七　巻末余語　二九九

昭和十八年五月十五日初版印刷　廿五日初版発行　三〇〇〇部　七月廿五日再版発行　三〇〇〇部　定価二円五十銭　特別行為税七銭　発行者　京都市中京区寺町通二条南入　大雅堂取締役社長田村敬男　印刷所　京都市下京区油小路通梅小路上　中村兄弟印刷所　出版会承認イ1507O5

大塚朗氏蔵本は三版で、奥付によると、再版発行は昭和二十一年一月二十日、三版は同年四月二十日の由。五月二十五日に一艸舎は自選歌集『花野』を発行している。薄半紙四つ折、横長で、本文七二頁、謄写版刷りで、表紙裏の序は、署名はないが、大塚五朗の文である。次の通り。

草は芽となり花となる。

今ここに同行自選の歌を聚めて、題して花野といふ。花野はたして繚乱たるや否やは知らず。然れど一筋につながりし一本の草、今その花を見る。楽しからずして何ぞ。ただそくばくの風霜に花をつけ得ざりし草のありしをうらむと雖も、これまた流るる世の常と思へば止むを得ざるべし。

願はくば花野に渡る風のより和かに、よりゆるはしく、やがてつぶらなる実のつぶらにみのらむことをのみ。

昭和十あまり八年の初夏

目次は、止静　大塚五朗　一／望郷　赤谷明海　九／見仏抄　森田曠平　一三／春彼岸　原田憲雄　一九／春の花　田中千雅　二五／病臥　平野醇三　三一／馬酔木　岡本和気子　三七／閑庭　宮崎鷹三郎　四三／青葉影　大塚朗　四九／光る兵器　杉田荘作　五二／み仏　勝見ふみ子　五七／望郷賦　吉田霞　六二／折々抄　加地富子　六七

「止静」にふくまれる作品は、前回までにすでに掲載済みである。

※一九九二年一月二十三日追記※　大塚朗氏が一月九日付の手紙で種々の教示とともに、雑誌『詩と随筆』第一号、『新釈伊勢物語』三版、『嵯峨野の表情』初版を示された。教示のうち、今回の原稿で訂正しうるものは、本文にも訂正を加えた。さらにここで『詩と随筆』などについて追記しておく。

『詩と随筆』B5一〇頁。三段と四段の頁がある。「京都三中の先生方で刊行していた同人誌……何号迄続いたか不明ですが　表題の『詩と随筆』という字は父のもので、本版にこの字を刻んでいる嬉しそうな顔を思出します」（大塚朗氏）。目次は、

▼あやめ会誌詩集第一、第二と其英米寄稿者　衣笠梅二郎▼雲　岩見護▼冬晴　森永▼子と遊ぶ正月　大塚五郎▼凡人断層（其一）浮沈子あがく　森永▼魚山冬日　立野信▼近代人一茶のプロフィル　山村湖四郎▼同人語録　同人

衣笠の本名は絹笠梅治郎、森永は森永義一、この二人と山村は英語の、岩見は国語・漢文の教員である。立野は立野信之、三中の職員ではないが、大塚の友人というので参加したのであろう。「同人語録」に大塚が「凡て物事といふものは何かの機縁が無ければ成立しないものとみえる。この雑誌なんかも話が出てから思へば久しいものであつた。」というが、この正月に集まって酒を酌み交す間に急に思い立って、発刊にこぎつけたらしい。昭和七年一月廿八日印刷、二月一日発行。定価拾銭。発行所は「詩と随筆社」、発行人は京都市花園馬代町三大塚五郎、印刷所は京都市猪熊通下立売下ル野村精版印刷所。

『新釈伊勢物語』B6一一三頁。大阪市南区順慶町一丁目の湯川弘文社が『新釈国漢文叢書』として刊行した

受験参考書のシリーズの一冊で、簡単な解題、本文、要旨、語釈、通釈。受験参考書ではあるが、「通釈」とつける訳文には歌人の面目が伺われる。昭和七年十月三十日初版発行。定価三十五銭。十一月五日、再版。同月十日、三版。巻末の広告によると、同じシリーズの『新釈枕草紙』『新釈土佐日記・東関紀行』『新釈紫式部日記』もてがけている。また岩見護が『新釈雨月物語・春雨物語』『新釈駿台雑話』を、森永義一が同社の『学生叢書』の『英文法動詞の形と意味』『受験和文英訳練習問題及解答』を書いている。

『嵯峨野の表情』　本稿（二二）に再版本について述べた。初版も内容体裁ともに変りはないようである。発行者、京阪電気鉄道株式会社西本正太郎。印刷所、大阪市西区江戸堀南通二丁目一三プラトン印刷社。

ドライビング・ミス・デイジー　1992・10　原田　慶

テレビの音楽番組を見ていて終わったので、スイッチを切ろうと思いながら、まわりを片付けているうちに、十時からの名画劇場が始まっていた。自動車事故らしくて、庭のくぼみに落ち込んだような場面が写っている。老婦人が困った様子で立っていて、若い人が二人で話している。何だろうと思いながらそのまま見ていた。

後でわかったところによると、この場面は一九四八年、アメリカ南部ジョージア州アトランタでの物語の始まりだった。

この婦人はデイジー、七十二歳のもと教師でユダヤ人、未亡人であるが、夫が町工場を起こして財産を残した

ので、何不自由のない暮らしをしている。しかも息子のブーリーが、父の工場を受け継いで、ますます発展している。デイジーは、通いの女中イデラを相手に元気に暮らしているが、少し衰えたのか、自動車の運転を失敗して、隣の庭まで突っ込んでしまった。心配したブーリーが、デイジーのために運転手を雇おうというが、デイジーは断わる。バスに乗って出るから、そんな無駄なことはしなくてもよいというのだった。

しかし、どうしても気になるブーリーは、頑固な母を説得することはやめて、勝手にホークという黒人運転手を雇ってしまう。給料を支払うのは自分なのだから、母が運転手をクビにすることはできないと考えたのである。このようなことがあって、デイジーとホークが出会うことになり、物語は始まる。

ブーリーに雇われたホークは六十歳、男やもめの黒人である。さっそく運転手としてデイジーの家にやって来たが、デイジーは相手にしない。ブーリーに聞かされているのでホークは気にかけず、台所でイデラを手伝ったり、掃除や庭の手入れをしながら様子を見ている。ずっと差別をされて、苦労してきているから、むしろ人に寛容で、忍耐強く、人の本心を見抜いているような強さとやさしさがあった。

ある日、女中のイデラが、コーヒー豆や洗剤がなくなったと言うので、デイジーがスーパーマーケットまで買物に出かけることになった。こんなことも女中にまかせず、自分でするところがデイジーらしいのである。バスに乗るために停留所へ歩いていると、ホークが自動車でついて来る。停留所まで送って行こうと言うのである。仕方なくデイジーはスーパーまで自動車に乗ることにした。自動車のなかで、ゆっくり走らせないとガソリンがたくさんいるとか、道が違うとか、さんざん不足を言う。ホークは逆らわないが、そういうことはホークの方が

よほどよく知っているのだった。デイジーのようなお金持がバスに乗ったりするのはおかしいとホークは言うが、デイジーは、自分は貧しい家庭で育って、食事も十分には食べられなかった、姉達が自分を学校にやってくれて、教師になってずっと働いてきたのだ、荷物を持ってバスに乗ったことぐらい何度でもある、という。金持はそれらしくすればよいのだというのがホークの意見らしいが、デイジーは金持ぶりたくはない。とても生真面目な性格なのである。

何か理由をみつけてホークを追い払おうと考えていたデイジーは、ある朝、収蔵庫を調べて鮭の缶づめが一個なくなっているのに気がつく。さっそく息子のブーリーを呼びつけて「ああいう連中はきっと何かをたくらんでいるものよ」とホークをクビにすることを要求する。うんざりしたブーリーが、もう知らないからと愛想をつかしているところへ、ホークとイデラが揃ってやって来る。そんなこととは知らない二人は元気に挨拶して、ホークがいう。

「奥様、きのうは鮭缶を一ついただきました。食べるようにとおっしゃったポークチョップが固かったものですから、それで、これ、鮭缶を買ってきました。収蔵庫へ入れておきます」

デイジーは自分の勇み足にきまりが悪くなって、何とも言えない顔をしている。ブーリーはおかしくて吹き出しそうなのをこらえている。デイジーはごみ箱からみつけてきた鮭の空き缶をブーリーに押しつけると、

「もう着替えをしなくちゃあ、ブーリーさようなら」

と大急ぎで自分の部屋に入ってしまう。

この時からデイジーの気持が少し変ってきて、ホークを受入れるようになってくる。デイジーが、もし自分の生活をきちんと管理していなかったら、鮭缶のことに気がつかずにすんだだろうから、ホークがいかに正直でこだわりのない人間であるかということも分からなかった。ホークの方はむしろデイジーの率直さをただしく理解していたように考えられる。

主人と運転手という立場ではあるが、デイジーとホークは、この後、二十五年間を共に過ごすことによって信頼を深め、ほんとうに心を開いてつきあうことのできる最も親しい友だちになるのであるが、その中に、いくつかの印象的な場面があった。

デイジーは毎週のように亡くなった夫の墓へ出かける。花を植えたりして手入れをするのだけれど、墓地の風景というのはいつも何かが感じられてよいものである。その日、デイジーはバウアーという知人に頼まれて、その人の夫の墓へ花を持ってきていた。それを墓に置いてくるようにホークに言うのだが、ホークは墓がわからない。字が読めない、新聞は写真を見ているだけだと言うので、デイジーはアルファベットさえ知っていれば、誰にも読めるはずだと、ホークに考えさせる。「バウ」は何の音に似ているかと尋ねられて、ホークはBだと考えつく。「アー」はどうかと聞かれて、Rだと気がつく。そこでデイジーは、あの木の下のあたりに墓があるはずだから、あたまがB、終りがRの文字のバウアーを見つけて花を置いてくるように言う。ホークは、探し当てて、花を置いてくる。文字が読めた喜びにホークの顔は嬉しそうだった。そしてクリスマスの夜、ユダヤ人はクリスマス・プレゼントはしないのだから、これはそうではない、と言いながら、デイジーはホークに本をプレゼント

する。『五年生の書き方』というもので、教師をしていた時、今の市長にもこれで教えたのだと言う。ホークは本をもらったのは初めてだと感動する。

月日が経って、女中のイデラが亡くなり、デイジーが九十歳に近くなった頃、大雪が降った。朝になっても暗く、電気がつかず、交通も止まった。一人ぼっちのデイジーが寒いのを我慢してローソクの明かりで本を読んでいると、道が凍っていて来られないと思っていたホークが、いつもの通りやってくる。運転も上手だったが、どうしても行かなければという熱意だったのだろう。驚いているデイジーに、途中で熱いコーヒーを買ってきていた。しみじみと嬉しそうに紙コップの熱いコーヒーを味わうデイジー、雪の中に孤立した九十歳近い老女に、これほどの暖かい思いやりが他にあっただろうか。この頃には、デイジーはホークに対してすっかり心を開き、信頼するようになっていた。

ある時、ユダヤ教会が、誰かによって爆破された。ユダヤ人もまた偏見を持たれている民族である。デイジーは、黒人解放運動の指導者キング牧師を囲む夕食会にも出かけて行く。息子のブーリーが「ママはいつからそんなにキング牧師に入れ上げるようになったんですか」とたずねているのでもわかるように、デイジーはもとから黒人解放運動に、関心を持っていたわけではなかった。ある日、ホークの運転する車で、遠くの親戚へ出かけたときに、途中でパトロールの警官に止められた。免許証を見せると、二人の警官は「ユダヤの婆さんと黒人の運転手か」と言って笑ったのである。その時に、デイジーは、自分の中にもある差別的な感情や偏見を意識するようになったのだった。

さらに時が過ぎてデイジーが九十歳を過ぎた頃、突然に混乱状態を起こす。まだ教師をしていると思い込み、子ども達に返す答案が見つからないと騒ぐのである。ホークから連絡を受けたブーリーは、事情を察して駆けつける。とうとうデイジーは老人ホームに入ることになった。ホークはここでデイジーと別れることになるのである。二年ほどたってデイジーの家も処分されてしまう。

ある日、ブーリーとホークが老人ホームにデイジーを見舞った。デイジー九十七歳、ホーク七十五歳である。デイジーは歩行機を押してゆっくりと歩いている。ブーリーが看護婦のほうへ行くと、ホークとデイジーは椅子に掛ける。机の上に感謝祭のパイが置かれていた。うまく食べられないデイジーに、ホークがスプーンにとってさし出す。デイジーはそれを食べて「おいしい」と言う。「元気なの？」とたずねる。ホークは「なんとかやってます」と答える。しばらくして「なんとかやっていくのが、人生ですな」とつぶやいて、またパイをさし出す。デイジーは黙って食べる。ホークも何も言わない。二人はいま、いちばん親しい友だちだった。

このデイジーを演じた人は、ジェシカ・タンディ、八十四歳だそうである。

これを見て、三年ほど前に、「八月の鯨」という映画を見たのを思い出した。これは何ともいえない美しい映画だった。アメリカのメイン州にある小さな島の別荘に住む二人の老姉妹の話である。海が見えてきらきらと輝くその風景と、老いた人達の静かな暮らしと、その美しさは言葉に表わすことができない。この海には、八月になると鯨が来るのだという。姉妹は八十歳前後で二人とも未亡人。姉は白内障で妹が面倒を見ている。姉は理性的な人らしいが、目が見えないためにずいぶん我がままで、いらいらと悲観的になっている。妹は真面目でいく

らかロマンチストだった。性格の違いから、時々、二人の生活が破綻しそうになる。それでも結局、ふたりは、たがいに一緒でなければやってゆけないことをよく知っていて、仲直りして手をとりあうのである。

この映画の姉妹を演じたのは、妹のほうが実際の年齢が九十一歳のリリアン・ギッシュ、無声映画時代からの名女優だそうである。姉がベティ・デイヴィス、七十九歳、ハリウッド黄金時代のもっとも輝かしい女優と紹介されている。二年ほど前に亡くなったことが新聞に出ていた。その持味を生かすために、年がさの人が妹になったのだが、二人はみごとに姉妹を演じた。このような人達には、人生の長い時間は、一瞬の輝きに凝縮されるものだということを、まざまざと見せられる思いがする。

どちらの映画も、老いの日を描いた名作だった。姉妹のほうは、互いの欠点を補いあって、肉親の愛情に支えられている。デイジーのほうは、几帳面すぎて、ゆうずうのききにくい性格だが、経済的に豊かであり、しかも驕らず、率直さとユーモアを解する心を持っていたから、ホークという協力者を得ることができた。ホークはいくらか楽天的だが、誠実で、日常生活に実力を発揮したので、デイジーは安心して老いの日を通り抜けることができたのだった。

ほんとうのやさしさで支えあう友達を得ることができたら、互いが自由で束縛されずに、相手を思いやる心を持つことができたら、老いの日はどんなに豊かで輝かしいものになることか。誰もが求めている理想に違いない。だからこそ、これらの映画が人間讃歌とでも言うようなしみじみとした感動を、わたし達の胸に蘇らせてくれるのだと思う。

如来だけが ―法華経巡礼 70―

1992.1.10　原田憲雄

05-03.「諸天よ、人々よ、わたしは如来であり、尊敬されるべき、正しく覚った者であり、わたしはみずから渡りおわってひとを渡し、解脱して解脱させ、よみがえってよみがえらせ、完全に涅槃して涅槃させる。此の世界も彼の世界も、わたしは、正しい智慧をもってあるがままに知る者、一切を知る者、一切を見る者である。ここにおいでなさい、諸天よ、人々よ、法を聞くために。わたしは道について説く者、道の案内者、道を知る者、道を聞かせる者、道に通達した者である」

tathāgato 'smi bhavanto deva-manuṣyā arhan samyak-sambuddhas tīrṇas tārayāmi mukto mocayāmy āśvasta āśvāsayāmi parinirvṛtaḥ parinirvāpayāmi / aham imaṃ ca lokaṃ paraṃ ca lokaṃ samyak-prajñāyā yathā-bhūtaṃ prajānāmi sarvajñaḥ sarva-darśī / upasaṃkrāmantu māṃ bhavanto deva-manuṣyā dharma-śravaṇāya / ahaṃ mārgasy 'ākhyātā mārga-deśiko mārga-vin mārga-śravako mārga-kovidaḥ /

「渡りおわって」とは、迷いに満ちたこの岸から、覚りの岸に渡り終わって、という意。「よみがえって」の原語は āśvasta で、śvas（あえぐ）に ā（除く）をかぶせ、「息を吹き返えす、生き返る」というほどの意。妙本は「安」（やすんじる）と訳す。枯渇した植物が雨を得て生き返るというこの品の譬喩と響応し、法華経が過去仏多宝如来から現在仏釈尊に継承されているというこの経の主題をも予告しているのであろう。だから、その原意「生き返る」を訳語にも生かすべきだろう。もっとも、妙本はこの前後を「未だ度せざる者は度せしめ、未だ

解せざる者は解せしめ、未だ安んぜざる者は安んぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ」といっていて、梵本の、わたしはみずから渡りおわった者、解脱した者、よみがえった者、完全に涅槃した者、という面が、訳文に出ていない。底本ですでに違っていたのかも知れぬ。しかし如来がすでに渡りすでに涅槃した人であることは分りきったことなのでそれは省き、原文の同語反復の面白さを訳文に生かそうとしたのであるのかもしれぬ。

05-04 そこへ、カーシャパよ、幾千万億という衆生が、如来の話を聞くために近づく。そこで如来も、衆生たちに、その機根や精進の優劣の差異をわきまえ、それぞれの法門をわかち与え、それぞれ多くのさまざまの法話を語って、喜ばせ、満足させ、歓喜させ、利益と安楽をもたらすのだ。その説話によって、衆生たちは、現世で安楽になり、死後にも善い処にゆき、そこで豊かな楽しみを受け、法を聞くようになる。この法を聞いて、障害のない者となり、だんだんに、一切を知る者の法に専念するようになる。その者の力により、場所により、勢いによって。

tatra kāśyapa bahūni prāṇi-koṭī-nayuta-śatasahasrāṇi tathāgatasya dharma-śravaṇāyopasaṃkrāmanti/ atha tathāgato 'pi teṣāṃ sattvānāṃ indriya-vīrya-parāpara-vaimātratāṃ jñātvā tāṃs-tān dharma-paryāyān upasaṃharati / tāṃ-tāṃ dharma-kathāṃ kathayati bahvīṃ vicitrāṃ harṣaṇīyāṃ paritoṣaṇīyāṃ prāmodya-karaṇīṃ(W:karaṇīyāṃ) hita-sukha-saṃvartana-karīṃ(W:karaṇīyāṃ) yayā kathayā te sattvā dṛṣṭa eva dharme sukhitā bhavanti kālaṃ ca kṛtvā sugatiṣūpapadyante yatra prabhūtāṃś ca kāmān paribhuñjante dharmaṃ ca śṛṇvanti / śrutvā ca taṃ dharmaṃ vigata-nivaraṇā bhavanty anup-

ūrveṇa ca sarvajña-dharmeṣv abhiyujyante yathā-balaṃ yathā-viṣayaṃ yathā-sthāmam //

「一切を知る者」とは仏・如来のことである。

05-05 たとえば、カーシャパよ、大きな雲が三千大千世界の一切を覆い、一様に雨を降らせ、あらゆる植物、潅木や薬草や喬木を、水気で満足させ、それぞれに、力により、場所により、勢いにより、その植物、潅木や薬草や喬木が、水を吸って、それぞれの種類に応じた大きさに成長する。同様に、カーシャパよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った者が、法を説くならば、すべてその法は、同一の味、すなわち解脱の味、離欲の味、滅尽の味をもつのであり、一切を知る者の智慧を最後の目標とする。そこで、カーシャパよ、衆生たちは、如来が法を説くのを聞き、記憶し、専念しても、かれらは自分で自分のことを知らず、理解せず、覚りもしない。なぜなら、如来だけが、カーシャパよ、あの衆生たちについて知っているのだ、かれらが何者であり、どのようであり、何に似ているかを。かれらが何を考え、いかに考え、何によって考えるかを。また何を修行し、いかに修行し、何によって修行するかを。また、何を達成し、いかに達成し、何によって達成したかを。如来だけが、カーシャパよ、目の前に知り、目の前に見るのだ、それら衆生たちが、おのおのの場所に立って、植物、潅木や薬草や喬木のように、小さかったり、大きかったり、中くらいだったりするのを、ありのままに。如来なるわたしは、カーシャパよ、同一の味の法、すなわち、解脱の味、寂滅の味、涅槃を最後の目標とし、常に寂滅し、ただ一つの立場にたち、虚空に通達するものであることを知っているが、衆生の傾向を尊重し、すぐには一切を知る者の智慧を説き聞かそうとはしない

のだ。あなたがたは、カーシャパよ、奇異とも希有とも思ったが、それはあなたがたが如来の微妙な言葉をさとることができないからだ。なぜなら、如来、尊敬されるべき、正しく覚った者の言葉は、理解しがたいものであるからだ。

tad-yathā 'pi nāma kāśyapa mahā-megha sarvāvatīṃ trisāhasra-mahā-sāhasrāṃ loka-dhātuṃ saṃchādya samaṃ vāri prasruñcati sarvāṃś ca tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatīn vāriṇā saṃtarpayati yathā-balaṃ yathā-viṣayaṃ yathā-sthāmaṃ ca te tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatayo vāry āpibanti svaka-svakāṃ ca jāti-pramāṇatāṃ gacchanti / evaṃ eva kāśyapa tathāgato 'rhan samyak-sambuddho yaṃ dharmaṃ bhāṣate sarvaḥ sa dharma eka-raso yad uta vimukti-raso virāga-raso nirodha-rasaḥ sarvajña-jñāna-paryavasānaḥ(W:paryavasānaḥ) / tatra kāśyapa ye te sattvās tathāgatasya dharmaṃ bhāṣamāṇasya śṛṇvanti dhārayanty abhisaṃyujyante na te ātman ātmānaṃ jānanti vā vedayanti vā budhyanti vā / tat kasya hetoḥ / tathāgata eva kāśyapa tān sattvāṃs tathā jānāti ye ca te yathā ca te yādṛśāś ca te / yaṃ ca te cintayanti yathā ca te cintayanti yena(W:yen) ca te cintayanti / yaṃ ca te bhāvayanti yathā ca te bhāvayanti yena ca te bhāvayanti / yaṃ ca te prāpnuvanti yathā ca te prāpnuvanti yena ca te prāpnuvanti / tathāgata eva kāśyapa tatra pratyakṣaḥ pratyakṣa-darśī yathā ca darśī teṣāṃ sattvānāṃ tāsu-tāsu bhūmiṣu sthitānāṃ tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatīnāṃ hīno-tkṛṣṭa-madhyamānām/ so 'haṃ kāśyapaika-rasa-dharmaṃ viditvā yad uta vimukti-rasaṃ nirvṛti-rasaṃ

nirvāṇa-paryavasānaṃ nitya-parinirvṛtaṃ eka-bhūmikaṃ ākāśa-gatikaṃ adhimuktiṃ sattvānāṃ anuraksamāṇo na sahasaiva sarvajña-jñānaṃ saṃprakāśayāmi / ācarya-prāptā adbhuta-prāptā yūyaṃ kāśyapa yad yūyaṃ saṃdhā-bhāṣitaṃ tathāgatasya na śaknuthāvataritum / tat kasya hetoḥ / durvijñeyaṃ kāśyapa tathāgatānām arhatāṃ samyak-sambuddhānāṃ saṃdhā-bhāṣitaṃ iti //

孤山雁信

—赤谷明海書翰集—　（補遺　三）

原田憲雄編

★1983 3 05　南部彰造宛。手紙。

南部家過去帳及び系譜について

一、南部家過去帳

江戸後期のものと判じていましたが、それは裏の分（多分文化・文政期のものかと思います）で、表の分は相当遡るようです。江戸中期・延宝・元禄の頃に調整され、順次増広された上、余白が無くなったので、裏に及んだようです。初めの調整者は高厳大徳かその兄の南部正利（浄味）ではないかと憶測しています。序文の内容や梵字からみて、僧の手に成るものと見るのが妥当かと思います・・・

何れにしても表紙の漆の一部が残っており、よくも大切に保存されたものと感心しております。寺院の過去帳でも江戸中期のものはそう見当たりません。

二、南部之系譜

最後の正武から引いた系図の線が延びているので、もとは更に残部があったものでしょう。現存部分の年紀中、最も新しいのは宝暦十一年ですが、それ以後どれ程時代を下げた頃の筆蹟かは何ともいえません。他の文書と照合して、筆者を捜し出すのが一番確かです。この文書は南部家の家系を知るためには貴重な史料ですが、壬生寺関係の僧侶の経歴も判明するし、中でも玄龍照当（過去帳では玄了照堂）が、招提寺との論争で擯出された記事は律宗教団史の重要史料といえましょう。壬生寺へも連絡したいと思います。

三、（これは他家に関するもので省略。ただ壬生寺に関して次のように書かれています。編集者注）

壬生寺住持栄政和尚は壬生寺過去帳に没年と名だけ出てきますが、彼の俗名が秀若信允であり、佐々木信光（石原と改姓）の二男であることがこれによって判明します。以上三点から壬生寺関係の記事を抄記させて頂きました。幸便に付してお返しいたしますので、ご査収願います。有難うございました。　昭和五十八年三月五日。赤谷生　南部彰造様

（※右は南部彰造氏編集の『壬生来住五百年記念　南部家文書』（平成三年十二月八日発行）の巻頭に掲げられた赤谷明海君の手紙である。同書を赤谷紀美子夫人から借りて転載した。南部氏の序文に次のように記す。

この記念誌（※『南部家古文書』をさす）を作るに当たって、誠に有難いことに、いろいろ関係の方々にご協力賜りました。先ず第一に赤谷明海先生に感謝したいと思います。先生は若い頃壬生寺におられ、その後唐招提寺の執事として、最後は平安高校に勤務という経歴のお方で、記念誌の中の主なものは、全て先生に解読して頂きました。先生には解読のほか、時代背景なども教えて頂き、壬生寺と南部の関係もはっきりし、

一層興味を持つ事が出来ました。この様な明海先生も五年前の秋亡くなられ、本当に残念でなりません。

同書中には「赤谷明海先生は南部家文書を数多く解読して頂いた方で、この書状についても次のような注釈が添えてありました」といった南部氏の「付記」のついたものがある。それらを次に拾っておく〉

「南部藤右衛門・西坊清玉宛南部吉右衛門書状」注釈。

一往右の如き釈文をお届けします。――――　書状の年時は清玉の寂年が延宝四年ですので、それ以前御朱印頂戴の事を併せ考えると寛文五年の公算が大きいようです。（四代将軍家綱の寺社領に対する朱印状発給は寛文五年の由）寛文五の書状とすると、「老僧三回忌」とあるのは寛文三年寂の高永和尚の忌を指すことになり、ピタリと合致します。

「標　壬生寺　文政四年」注釈。

文政四年の壬生寺の鑑事は、筆跡より、法金剛院で亡くなられた宝静長老のものと思われます。

「和歌　宮城野萩　年代不明」

◎南部家の当主は彦富、この文の筆者は成章と判ぜられる。

◎文中の※「為仲」は陸奥守源為仲のことで、任果てて都に帰るとき、宮城野の萩を長びつ十二合に入れて持ち帰った由。吉田東伍「増補大日本地名辞書」第七巻三九七ページ中段に『無名抄』を引いて示している。

◎又吉田辞典の同じところに、宮城野の本荒の里の萩が特に他に異なる色であるのを「都苞」から引いている。正春の歌「もとあらの小萩」はそれに関連していると思われる。昭和五十八年七月二十六日

非日常空間への移動（中国の詩人と仏教　一九）

1991.12.10　原田憲雄

陶淵明の「桃花源の記」と慧遠の廬山諸記との差異を検討するまえに、「遊記」について定義しておきます。

《非日常空間への移動》に関する散文を主とする私的記録

「非日常空間」とは、日常とは違った場所、というほどの意で、たとえ小さなピクニックであっても日常とは違った体験をする場所をさし、その「場所」は、具体的な場所はもとより、過去や未来のようないわゆる時間や、夢や酔いや飢えや幻想や理想のような身体的・心理的状態をも含むものとします。そこへの「移動」とは、日常空間から非日常空間への進入・滞在・帰還をさしますが、三つが完備する必要はなく、また「記録」の行為そのものが進入・滞在・帰還の意味を担いうるということも考えられましょう。「散文を主とする」というのは、主体は散文だがそのうちに詩を含んでも差し支えないということです。「私的記録」には二つの側面があり、一つは、非日常空間への移動が記録者自身の行動であることを原則とし、しかしなにがしかの例外は認められます。二つは、記録が、その動機・目的において政治や軍事の利害から離脱していることで、この面では例外は認められません。地誌が、遊記と区別されるのは、製作の動機・目的が政治や軍事と関わるからで、後の『大唐西域記』なども、「文学上の技巧」の多寡といった曖昧な基準ではなく、皇帝の政策的指示によって編集されたものという点で、遊記と区別するのが妥当です。

わたしの定義は、「遊記」を考えてゆくうえでの作業仮説として、後代の遊記をも視野にいれて作ったもので、

話を進めてゆくうちに部分に変更を加えなければならなくなるかもしれませんが、大筋においては基準として認めうるものでしょう。

さて、この定義をあてはめると、慧遠の廬山諸記も陶淵明の「桃花源の記」も、基準とはぴったり合わぬようなところがさっそく目につきます。慧遠は廬山に住んでいて「廬山記」を書いたのだろうから、廬山はかれの日常であって、その「廬山記」は《非日常空間への移動》の記録とは見なしがたい、とか、「桃花源の記」は《非日常空間への移動》の記録には違いないが、武陵の漁師の行動で陶淵明が行ったのではないから、遊記とするのは無理だ、とかいったことです。

「桃花源の記」は、一般に詩の序、雑記、あるいは小説とみなされ、わたしもそれを覆す気はなく、その上で、形式としては違っても慧遠の廬山諸記との性格の親しさを確かめえたら、ここでの目的は達するのです。

「廬山記」は、慧遠の住む廬山の記録です。しかし慧遠の日常は、初めは廬山の麓の西林寺、後にはやはり麓の東林寺での瞑想や研学でした。ところが廬山は広大で、様々の伝説に富んだ地域です。「廬山記」はその広大な空間・時間への遍歴を記しているのですから、やはり《非日常空間への移動》といえましょう。慧遠のこのような遍歴は、仏教における「遊行」や「経行」に由来するのであろうと、わたしは推測しています。遊行とは、釈尊が衆生教化のために諸地方を旅されたことにはじまり、僧が修行と教化のために遍歴することをさし、経行とは、座禅の疲労を治すための散歩です。

「廬山記」に次の記事が見えます。

匡続先生なるひとがいた。殷から周へかけてのころ、その時世の混乱を避けてこの山の麓に潜み隠れた。ある説では、かれは仙人から道術を授かり、巌山に遊行し、洞穴を仮住まいとすると、巌がたちまち館となった。同時代の人達が感心してその住まいを「神僊（しんせん）の廬（いおり）」といい、これが山の名となったのだ。

「殷から周へかけて」というのは、黄河沿岸地帯で武力革命のあった前一三〇〇年頃の時代をさし、匡続は、伯夷・叔斉のような殷朝の遺民で、その都の洛陽あたりから、戦乱をさけてはるばる大江流域の廬山までやってきたというのでしょう。この伝説は、桃花源の住民が秦代末期に戦乱を避けてやってきたという時間設定と似ていて、「廬山記」が「桃花源の記」に与えた影響と考えられるかもしれません。しかし、匡続にしても、後に廬山に住む董奉（第一六回「慧遠」参照）にしても、一人でやって来、独り住んだのに、桃花源のほうは村全体がそろってやってきて、共に村を作って住むところが、違っています。

匡続も董奉も仙人とよばれますが、董奉は人の病気を治してやり、杏の林を開拓したりして、外部の人達と交渉を絶ちませんが、桃花源の人達はべつに「仙人」と呼ばれず仙人臭くもないのですが、外部の人とは交渉を絶ち、桃花源の内部は美しく開墾されていますが、外の桃の林はかれらが開拓したのかどうかはわかりません。

廬山は、董奉の杏林は別にして、おおむね岩石ばかりの巍々として聳えたつ巌山ですが、桃花源はやさしい草木芳花にみちた洞穴なのです。これは「廬山記」と「桃花源の記」の決定的に違うところです。

中国人は『易経』に代表されるように、陰と陽の二元の組合せでものを考えることが好きですから、仙境、す

なわち非日常の空間にも、凸と凹の両方向に分岐展開する形態を考えたのです。凸はいうまでもなく突出して男性的であり、凹は奥屈して女性的です。もっとも凸は凸ばかり凹は凹ばかりというのではなく、凸にはなにがしかの凹がともない、凹にはいくらかの凸がともないます。こうした仙境の歴史や類型などについては、三浦國雄氏の『中國人のトポス』（平凡社選書）が丁寧親切に描いていますから、くわしい説明はそちらに譲りますが、廬山は凸型の、そして桃花源は凹型の仙境の典型であり、しかも典型として確立したもののうちで早い時期のものといえましょう。

慧遠の「廬山東林雑詩」と「廬山記」を、さきには別々に考えましたが、詩の内容は「東林」に限定されず、廬山全体を歌ったとも見られますから、「廬山記」と対のものとしても、不自然ではありません。題は初めから「東林雑詩」とあったのか、ただの「廬山詩」だったのか、「廬山記」に付記されて自体の題はなかったのか、それらの事情は、今では判断しにくいのです。詩が「廬山記」に付記されたものなら、「桃花源の記」に詩がついているのと、形式として共通し、そして廬山諸道人の「石門に遊ぶ詩、并びに序」とも共通することになります。

「石門に遊ぶ」が非日常空間への遍歴であることは「廬山記」「桃花源の記」と共通しますが、多くのひとの団体遍歴である点は違っています。「石門に遊ぶ」には「かわやなぎや松、花咲く草はもりあがるばかり目にあざやかで」といった「桃花源の記」の方向のやさしい美景もありはしますが、大体のところ、ごつごつした巖山、すなわち凸型の仙境で、遍歴者がその高い処に登って行く点では「廬山記」と同様です。「石門に遊ぶ」詩に、

「頭をあげて雲湧く石門のぼりゆき、はるかに天上の太清宮をしのぐ感じだ」というのは、その上昇志向にふさわしい詩句です。

ところで、「桃花源の詩」の結びの二句は、

願言蹈輕風　　どうか、軽やかな風をふまえ、
高挙尋吾契　　高くのぼってわが理想郷をたずねたい。

というのです。「高くのぼる」のは廬山のような凸型の仙境には似つかわしいが、桃花源のような凹型の理想郷にはまったくふさわしくありません。陶淵明は、「物事に対し心さえ高ければ、なぜ仙山に昇る必要があろう」（五月旦作）という人で、集全体でも「高くのぼる」といった上昇志向が、反語としてでなしに表現されるのは、ここだけです。この詩は、内容としてはほぼ「桃花源の記」の繰り返しで、調子は堅苦しく、他の作に較べてあまり面白くないので、後の人の偽作だろうという説があります。「桃花源の記」は詩がなくても通用し完結していると思いますが、あるいは、実際に詩はついていたが、「記」が独立し、小説として流行するうちに、「詩」が失われ、しかし「詩」があったという伝えだけは残っていたので、後の人が作って補った、というようなことであったかもしれません。そのような例は、中国では珍しくないのです。もっとも、「桃花源の記」にはじめから「詩」がついていなかったとすれば、「桃花源の記」と「石門に遊ぶ」とは、形式としては共通しないことになります。ところが、陶淵明には「斜川（しゃせん）に遊ぶ、并びに序」という、「石門に遊ぶ」にそっくりの形式の作品があるのです。次回は、それらのことをめぐってお話することにしましょう。